



第5章 都市再生調査事業の総括

今回の調査事業の総括

都市再生は、とくに地方都市において、中心市街地活性化との関連で語られ、その意味でもつばら経済的な問題として捉えられることが多いように思われる。しかし、中心市街地が商業的に復興すれば都市の再生はなるのであろうか。その都市に蓄積されてきた、あるいは継承されてきたさまざまな要素を基礎として、これからの都市のありかたに関連させ、どのようにすればそうした要素に新しい可能性をみだし、そこからその都市の個性と活気あるまちとしていけるのか、それが本来の都市再生の問いである。桐生において、その要素は、江戸時代以来主要産業であった織物業を、明治時代から衰退しつつあるとはいえ現在まで支えている織物生産の場、ノコギリ屋根工場と捉えられる。ノコギリ屋根の工場自体はほかの都市でもみられるとしても、数だけでなく、その土地性と強く結びつき、地域資産としての価値をもっていることは、桐生のノコギリ屋根工場の大きな特徴といえる。その保存と活用は、まさしくこれからの桐生のまちづくりをどのように進めるかにも関わっている。

そこで本調査では、このノコギリ屋根工場群の現況把握と今後に対する意識調査を基礎とし、これに文化、建築、まちづくりなどさまざまな領域からその建物群が果たすべき役割を探ることとした。他方、現実に機能し、活用されているノコギリ屋根工場をみることにより、どのような取り組みがなされ、いかなる可能性があるのか、また建築的に解決すべき問題点とは何かなどを考えることとした。

現況調査は、これまで15年以上にわたり続けられてきた調査をもとに、とくには平成15年度に作成されたリストに載せられたノコギリ屋根工場の現状の確認を行った。その結果、ノコギリ屋根工場の現存数は237棟が数えられただけでなく、リストに掲載されていない建物も新たに少なくとも4棟確認できた。この237棟の分布状況を桐生市の都市計画区域にもとづきみると、本町、東1〜7丁目などからなる中央東地域に全体の約30%の73棟があり、中央南（錦町、新宿などで36棟）、中央西（堤町、永楽町などで15棟）地域とあわせると、中心地区に全体の約半数が集中していることがわかる。しかし最近の5年間でノコギリ屋根の建物の消失率が高いのも、この中央東地域ならびに隣接する南地域である。他方、広沢町（35棟）や境野町（25棟）など周縁地域では同じ時期における建物の減少の割合は小さい。ノコギリ屋根工場の建設時期についてみると、昭和戦前期に建てられ現存するものが、全体の半数にのぼっている。工場の利用状況では、建設当初のまま、すなわち織物業に関連した使用目的のものが全体の約25%であり、倉庫としての利用をわずかが上回った。地域的にみると、織物業に使われている場合は周縁地域によくみられるとともに、この地域での消失率が小さい。このように、建設時期や残存地域とその分布、そして利用状況と消失率などの特色は、桐生の織物業のかつての状況を現在に伝えているといえる。

ついで、現況確認とあわせて行ったノコギリ屋根工場の所有者あるいは使用者などへのインタ

ビューから、現状の目的で使っていきたいという考えが70%を越えていることがわかった。残したい、あるいは活用を考える人がいたら残すというように、建物として残し使用するという意見が80%を越えている。このように活用への意欲も高いといえる。

ノコギリ屋根の建物が都市再生に対して果たすべき役割についてみると、その可能性もまた問題点も、ノコギリ屋根工場が抱える建築的な特色、また敷地における配置や立地の特徴に関連していることがわかる。例えば、活用状況から、織物業などの工場はもちろん、展示などの施設、アトリエ、そのほか店舗など、さまざまな方向性がとくに近年試みられるようになってきた。こうした場合でも、ノコギリ屋根工場のもつ豊かな小屋裏（屋根裏）空間や北側を主とした採光などを活かしていることが多く、建物の特性をいまでも有効とする方法のあることが示されている。とはいものの、現在建築的に問題なく使われている場合には、所有者などが修繕など維持、管理に努めていることが要因として大きいことも事実である。ノコギリ屋根特有の雨仕舞いの悪さや、はますべてが木造で建築後最低でも35年以上を経ているという老朽化に対する措置が、所有者個々というだけでなく、ノコギリ屋根の建物全体として速やかに取られることが必要である。また、活用が所有者以外による場合に、所有する居住者と使用者の間に生ずる諸問題なども、今後考慮していかななくてはならない課題といえる。活用の実践からみると、建物がそこにある、それゆえ残すというところから、ノコギリ屋根工場を取り巻く生活も含めて建物を共有するとともに、利用することから生ずるさまざまな情報も共有していくことのできる仕組みを作ることが、重要であることがわかる。産業資源や文化資源としてのノコギリ屋根工場の理解が広まるなか、その資源を資産として桐生に有意義としていくためには、行政側の対応や支援もなくてはならず、所有者そしてそれを直接支える民間の力と、それでは充分でない部分を補完する行政の力を協働させる仕組み作りも肝要である。工場ゆえ生産に結びつく点からのノコギリ屋根工場の認識がある一方、いわゆる観光資源としての役割も、これから考えていくべき課題である。かつての織物の桐生から文化の拠点の桐生という方向性を、ノコギリ屋根工場に見出ししていくことが、近代化遺産としてのノコギリ屋根工場の再生、すなわち桐生の都市再生に結びついているからである。

今回の都市再生モデル事業の調査の結果、利用状況や所有者などの意欲からみて、ノコギリ屋根工場の活用への環境は整ってきていると判断してよい。他方、建築的あるいは社会的な仕組みでの活用を阻害する要因も明らかとなってきた。すなわち、建物単体として取り組まれるべき方向性が、明瞭となってきたといえる。この点では、ノコギリ屋根所有者の会のように、所有者や使用者が問題意識を共有できる、また相談したりあるいは知恵をだしあえる組織の確立も急務といえる。さらに、市民のノコギリ屋根工場への認識を一層高める持続的な取り組みも重要である。一方、まちづくりの視点からすると、桐生市内に点在するノコギリ屋根工場は地域的資産であり、桐生の個性を表現するものとなっている。今後の桐生がどのような都市を目指すべきか、という点からしても、ノコギリ屋根工場はまちづくりの核となることのできる。それは、織物工場として継続的に使われていく場合から、新たな活用方法を追究していく場合までを含んでいる。桐生がこれまでに育んできた、そして築いてきた都市としての歴史を、継承しながら発展させるという意味で、ノコギリ屋根工場のもつそして果たす役割はきわめて大きいことを、今回の調査は示している。

